

楽弓

その歴史、製作と用法

THE BOW,

ITS HISTORY, MANUFACTURE AND USE

第二部弓作り



この資料は、イギリスのヘンリー・セントジョージ氏の書いた「THE BOW, ITS HISTORY, MANUFACTURE AND USEBY」(パブリックドメイン)の第二部「弓作り」の翻訳です。
訳責、訳文© 野村成人・コースタルトレーディング/ムジカアンティカ湘南
2015 June

HENRY SAINT-GEORGE

第二部 弓作り BOW MAKING.

第9章 素材—ブラジルウッド、馬の毛、松脂の作用

MATERIALS—BRAZIL WOOD—HORSEHAIR—THE ACTION OF ROSIN.

おもしろいことに、異質で関係がありそうもない奇妙な事柄が人類の歴史の中でとても重要な結果を引き起こしています。たとえばバイオリン弾きが夕方の一仕事のあと、いつものタバコを一服愉しんでいるときに、彼の楽しみのは半分は15世紀のジェノバの悪辣な海賊に負っていることを認識しているでしょうか？文明を豊かにするナツメグやバンジョーなどもろもろの新大陸からの恩恵に加えて、タバコやブラジルウッド(良い弓を作る為の唯一の材料)がアメリカから入ってきました。バイオリニストの心を彼の幸福を満たす多くの神殿にたとえるなら、卵のバランスで有名なクリストファー・コロンブスのために一角をとっておいてあげてください。

バイオリニストたちが完璧な弓を切望していたときにフランソワ・トルテが現れて待ち望んだものを与えてくれたというのも興味深いことです。

彼がいかに砂糖樽の木で修練を重ねたか、すでに前の章でお話しました。これはもちろん彼自身が新しく使うようになった道具に熟達するためです。また、必須の強さ、軽さ、弾力を兼ね備えた木材を探して多くの木を試しましたが、ブラジルのペルナンブコ州から染料として輸入されていたレッドウッドに出会うまでは満足できませんでした。

実際に、弓作りに必要な材そのものがすでに存在していたという事実を認識している人はほとんどいないのではないのでしょうか。以前は弓の製作者は船から降ろされたままの状態の粗い原木の状態を買わざるを得ず、それから使い物になる材をえり出すといううんざりするような大仕事にとりかかります。実際、この木は特にねじれやフシが多いので、目的にかなう材はほとんど無く、めったにみつかりません。

今やこの作業は買い付け会社がやってくれて、望まれるまっすぐな木目のものを選び、角棒に切り出して名工が弓を削れる状態にして提供してくれます。

数年前には製作者たちはなるべく比重の重い材料を求めました。スティックをできるだけ細くしたいと思っており、比重が重ければ重いほど弓を通常の重さにするにはスティックを細くできるという考えからです。しかしこの方向の間違いはすぐに明かになりました。スティックは好きなだけ細くできるかもしれませんが、ヘッドはある程度の幅と高さが必要です。その結果、これらの細いシャフトの弓はトップヘビーになってしまいました。

したがって、今ではもっと軽い材料が使われており、最近のイギリスの製作者たちの弓にはとても良いものがあります。手にも目にも良いバランスを持ったものが作られていると申し上げておきましょう。

ドイツやフランスの安い弓にはディーラーが「ブラジレット」と呼ぶ木でできているものがあります。幾分か本物のブラジルウッドに近い種類ではありますが、硬さや弾性がまったくありません。

バイオリニストが弓を手にするとき、どれだけ多くの世界中の遠隔地の産物がこの魔法の杖に集約されているか認識しているでしょうか？西からの木材、東からの象牙、海からの真珠母貝、東や西やもしかしたら地球の反対側からの金や銀、そこに馬の毛を足すなら大英帝国からも、植物・動物・鉱物が我々に楽しみを授けてくれます。

弓の毛は完璧に円筒状で一貫して同じ太さでなければならないので、木材選別と同様に、馬の毛を選ぶのもしっかりした眼識が必要です。

毛はとても注意深く選別しなければなりません。想像できるように毛の断面は生えてくる毛穴の形状に左右されるので、あるものは片面が平らで、ものによっては四角形や三角形のものがあり、良い物は思うほどたっぷりはありません。

使い物になる毛の比率は10%以下と想定されます。フェティスによるとトルテはフランス産の毛が「他の国のものより太くて強靱だから」好んだと言われます。私は現状ではおそらくロシア産のものが多く使われていると思います。

トルテの娘は毛を選別して下ごしらえするのを非常によく手伝いました。

彼の手法は、まず毛を普通の石鹼でしっかり洗ってから糠水(bran water)に浸してゴミをしっかり除いてから「青い水」(blue water)に漬けます。数年前に心得違いの人達が毛を科学的に漂白しようとした。しかし、この結果とても乾燥してもろくなったので、この企てはありがたいことに放棄されました。

今日では弓に使われる毛の平均的な数は150から200本です。トルテの時代も同様でした。

弓毛の構造と作用、松脂の果たす本当の役割などに触れておくのも有用でしょう。

ヘロン-アレン氏がいみじくも述べたように「松脂の粉が発音の上で物理的、科学的にどのような作用をしているかということを理解しているバイオリニストがほとんど居ないのには驚きます」。さらに一般の認識について(for the laity)「多くの人が松脂を塗っているところを見て「早く動くために潤滑油をつけている」と思っている」と言います。

毛を拡大して見ると表面が小さなウロコで覆われていることがわかります。通常はこれらのウロコは毛の本体に沿って寝ています。しかし松脂を毛にこすりつけると、松脂の小さな粒がウロコの下に入っただのこぎりの歯のように立たせます。これらの立ったウロコが弦に対して極微のピックのように働いて、おおまかに言うとマンドリンのピックによるトレモロのように持続音を起こします。

それは単純に素早く継続した衝撃です。ちょっと考えれば弦に押しつけ続けると振動を起こすよりも抑圧するほうに作用することはわかるでしょう。実際に松脂を塗っていない弓は圧着し続けるだけなので、音は出ません。

毛は通常はその自然な生え方に従って、つまり根元を先のほうにとりつけます。こうするとウロコは下方に向かうので、ダウンボーで最大のアタックを与えます。半分を一方向で、残り半分を反対に向けてつけてみた人も居ますが、この手順で目に見えた結果があったようには思いません。

第10章 弓製作者に必須の資質、シャフト削り、反り、ヘッド、溝、

ナット (訳注：以下、現代日本の通称「フロッグ」を原文どおり「ナット」と表記します)

QUALITIES ESSENTIAL IN A BOW MAKER—SHAPING THE STICK—SETTING THE *Cambre*—THE FACES—THE TRENCHES—THE NUT.

弓作りの仕事は従事する人に忍耐と集中力という希有な才能を要求します。

必要な技術は、特に強靱で繊細な手と、数学的な精度を持った目が必須です。別々の材の間での違いだけでなく、1本の材の中でのさまざまな程度の弾性の違いを感じ取れるだけの指先の繊細な感覚が必要です。またこのような堅い木を精密に削れるだけの強さも必要です。

この種の仕事に必要な強さというのは体重や身体のひねりを利用できる普通の大工仕事に要する強さではなく、むしろ弓作りに必須の絶対的な正確さをもたらす、対立する力を協調させるような自己充足的な強さが必要です。ほとんど全ての作業が視覚に頼るので、目で見ても確実に判断できねばなりません。弓作りは常に神経をはりつめていなければならないので、間違いなく神経にこたえる仕事です。

この章でお話するほとんどの細かい話は、ジェームス・タブスの息子で故アルフレッド・タブス氏に負っています。彼はよい技術者でしたが比較的若くして1909年に亡くなりました。弓のシャフトは一本ずつが独自の性質を持っているので、フィッティングや調整など全ての工程を通じてその固有の性質を意識しながら作業をする必要があるため、彼は一度に一本の弓しか作らないと話してくれました。人間の心はたった3本のシャフトでも同時に作業すると確信をもてなくなるので、それぞれの弓は次に取りかかる前に完成させます。

34図にあるような荒削りの棒から、最初にとりかかる作業は「喉を丸くする rounding the throat」ことです。いいかえるとヘッド用に為に残してある四角いブロックのすぐ下の数インチ、人によって喉 throat とか neck と言われる部分を丸く削ります。このあと、残りの四角い部分の角にカンナをかけて八角形にします。弓の仕上げを八角形にするなら喉も丸ではなく頭のところまで細心の注意を払って角をカンナでおとします。

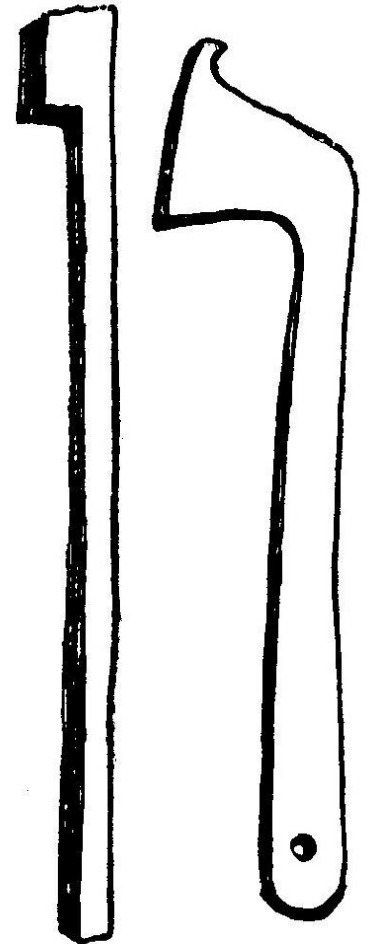


図34

図35

次の作業は先端部のブロックにとがらした細い鉛筆でヘッドの外形パターン図(35図)を写し取ることです。これは目だけでなくパターンに頼る唯一の作業です。

ヘッドの形を作るのは、また後でスティックを先細りに削るのも、全く視覚の正確さが頼りです。これらの仕事に必要な、手作業と目の絶対的な正確さは長年にわたる修行の賜です。

ヘッドをおおまかに削った次は、繊細な「セッティング」の作業です。これは「スプリング」または「キャンバー cambre」をつけるとも呼ばれます。

カーブの程度を定義づけるのは、ヘッドのフェースからナットのフェースに引いた想像上の直線とスティックの最大の反りの部分との距離です。この最大幅の場所までの、両端からの決まった長さというものではありません。

それはスティックの硬さの分布を観察して、全く作者の経験上の判断に頼るしかありません。経験豊富であればスティックの硬さの違いにかかわらずカーブを決められます。

観察の結果、スティックの特定の場所が他よりも少し弱いとわかると、作者はそこに最大の「スプリング」をつけます。しかしまず、良い製作者はあきらかに均質でないスティックなど決して使わないことはご理解ください。格別に良い木目で、経験豊富な奏者にしか分からない程度の極微の弱点しか修正する手間はかけません。多くのバイオリニストが良い弓は偶然できるものだと思っているのは驚きです。実際に良い弓を作ることができる製作者が居るのだということはほとんど誰も知らないようです。

弓のセッティングの要件は熱です。まっすぐな棒に、的確に熱を加えて必要な反りがついた状態で安定させます。今日では普通のガスの炎の熱を使います。ほんの少しの湿気があっても木の細胞から色素を抜き取って木を漂白して松の棒のようにみすぼらしい見かけにしてしまうので、湿気のない乾燥した熱が絶対要件です。実際に、この工程で良いスティックから抜ける色素は、たとえ湿気のない熱を使っても手が深い紫色に染まるぐらいです。

このセッティングの工程で注目したいのは、繊維をスティックの中心部まで必ず均一に熱すること。

もしこの点を十分に注意して作業しないと、熱を受けなかった繊維は本来の真っ直ぐな形状を保とうとするので時とともに熱を受けて曲げられた繊維の抵抗に打ち勝ってたわみをなくすか、それともありそうなのは弓がゆがんでしまいます。この現象を理解するには、どんなしなやかな棒、たとえば散歩用のステッキでも手でたわめてみたときに、手の圧力をゆるめたとたんに元の状態に戻ることでわかるでしょう。これが、質の悪い弓で、加熱されていない内部の繊維に起こることです。内部の繊維お互いの抗力は、内側の繊維のアクティブな力が加熱された外側の繊維の受け身な力に勝ります。

セッティングの作業の時点では、外面が焼けたり焦げたりしてもよいように最終の意図する太さより5割ほど太くしてあります。セッティングが満足にできたら丸くカンナ掛けしてさらに溝を切ります。これはナットのネジ目が移動する溝です。

それからクッシュマン・チャック(訳注: 旋盤にかけるものを固定するためのチャック)をつけた旋盤でスクリュー自体を通す穴をあけます。

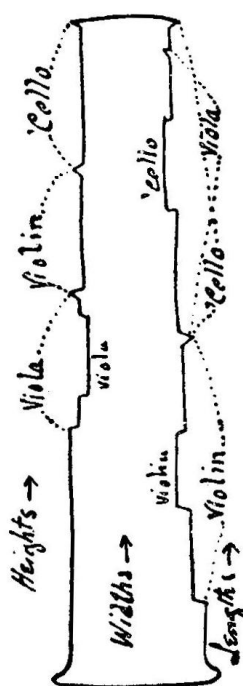


図36

次に「ブラックフェース black face」を貼り付けます。これは黒檀の薄板で、ヘッドの下面に貼って強度をあげるとともに、ヘッドの表面に張る象牙か金属の板のしっかりした土台になります。象牙の表板は牙の塊から36図の形に切り出します。最上の接着剤で張ってしっかりした麻糸で縛り付けます。

これはもう一つのとても難しい、デリケートな作業です。象牙はとても硬く変形しにくい素材なので、本来の目的であるヘッドの強化と保護に足るほど充分厚い場合、弓先のフェースのカーブに沿って押しつけると簡単に割れてしまいます。ときおり、安物の弓では象牙のフェースがとても薄くて下の青っぽい色が透けて見えるものもみられます。こんな薄いフェースは、貼り付け作業は簡単ですが弓の保護には紙切れと大差ありません。

近年では金属のフェースが使われるケースがどんどん増えていますが、私個人的にはしっかりした象牙のフェースが好みます。金属はそれ自体強度的には強いのですが、しっかり接着された象牙はより一体感があると感じます。土台になる硬い木の上の黒檀から象牙という構造では密度がよりなめらかに構成されています。



フェースを調整したあと、ヘッドに丸い穴をあけてから毛を受けるための四角形のヘッド溝を空けます。

それからナットを取り付けます。多くの方々が、最上の製作者でもできあいのナットを卸業者から仕入れてスティックにつけるように思っていますが、良い製作者はそれぞれの弓にあうようにナットを自作します。これで弓のバランスをとることができます。

37図はバイオリン、ビオラそれにチェロ弓用のナットの寸法を決める定規です。

弓を最終的に仕上げる前に毛を張って(毛張りについては12章をご覧ください)全て問題がないかをチェックします。もし弓の反りに問題があったら、この段階で修正できます。全てが問題なければ、仕上げで磨きます。34図の粗い弓材から、アーティストをとろけさせ、喜びにふるえ、歓喜にひたらせることのできるこの段階まで丸一日の仕事です。

図37

第11章 修理—接ぎ木—カップの作り直し—ナットの修理—チップを新しくする

POSSIBLE REPAIRS—SPlicing—RENEWING CUPS—RESTORING THE NUT—RE-FACING.

弓の修理には実際に弓を作るよりも技術を要します。そのことは部外者にはあまり理解されていません。

バイオリニストは大雑把に2つに分けられます。一方はなんでも修理できると思うし、一方修理などできないと思っている人も大勢います。子供のころに会ったお年寄りの尊大なマチュアバイオリニストを思い出します。その人はばつの悪いことに私のソロを聴いてくれただけでなく、親切に話しかけてアドバイスまでしてくれました。

「さてさて、きみはスチールの弓を絶対手に入れたほうがいいよ。お父さんにそう言いなさい。きみがいま使っている棒(ひえ～、ぼくの大好きなルポ-)は今はまあ結構だけどそのうち毛が抜けて使い物にならなくなるよ」。私はあえて毛替えもできるでしょ、と言いました。「ああ、もちろんもちろん」「それができることはわかってるし、する人も多いけど、決して前と同じにはならないよ」。「いやいや、一旦毛が抜け始めたら新しい弓を買うしかないね。でも、もしスチールの弓を持っていたら毛は絶対に抜けないし、最初の状態のまま一生変わらない状態で使えるよ」！このおじさんはスチールの弓でもうけようとはこれっぽっちも思っていなかったと思います。

また、逆にこういう人もいました。その人は小さな息子がいて、その子は棒振りの稽古をするのにお父さんの弓をこっそり借りるくせがありました。避けられない事態が起こったあげく、彼はちょっとした工夫で何ができるかの良い例として誇らしげに私に見せてくれました。二つに折れた弓はしっかり接着され、割れたところをカバーするために鉄のペン軸2本を添えてしっかりと強い絹糸で巻いてありました。その弓の持ち主が言うには「いやいや、前とまったく同じぐらい良いですよ」

ここで弓の修理にはなにができるか、またどうしたほうが良いかを簡単に述べたいと思います。

もし弓がスティックの先の方で折れたら組み継ぎをすることはできますが、オリジナルの反りとバランスは決して再生できないのでやる価値はないでしょう。第一に、いかに上手に合わせたとしても、このようなデリケートな道具のバランスを妨げるには十分な異分子が介在することになります。さらに、接ぎ木は古い木部に**接着する前に**反りをつけねばならないので全体として満足できるカーブをつくるのは不可能です。

オリジナルのヘッドを再調整するのできません。弓にかかる負荷に耐える唯一の場所は数インチにわたる長い斜めの部分だからです。



図38

しかし、38図dの部分のハンドルを継ぐのはしばしば行われますし、またそのほうが良い場合も多くあります。大事な弓が、指や親指の圧力やナットやスクリューの摩擦で通常のリペアでは直せないぐらいくたびれてくることはよくあります。そういう場合はハンドル部をつけ替える必要があり、これは上手な技術者であれば弓のバランスにまったく影響なく修理できます。

この場合、ジョイントはラッピングの最上部から4~5インチ下方に向けて斜めに継がれます。このような場合、継ぎ目は毛の平面に対して直角になるように設定します。そうでなければ長持ちしないでしょう。オリジナルのハンドルであれば、しばしばつけ替えた後もよい状態にできます。

スクリューの孔がくたびれたり、カップ(スティックの最先端でチップにあります 図39)が壊れたりした場合、ドリルで孔をあけて、よくシーズニングした弓材から孔と正確に同じ太さに旋盤で削り出ししっかりと接着します。完全に乾いたら、新しい弓を作るのと同様にスクリュー孔をあけなおします。ハンドルにひびが入ることもあります。その場合、溝に埋め木をして彫りなおします。

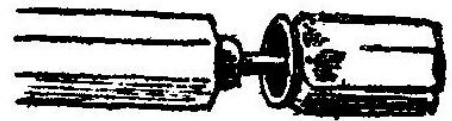


図39

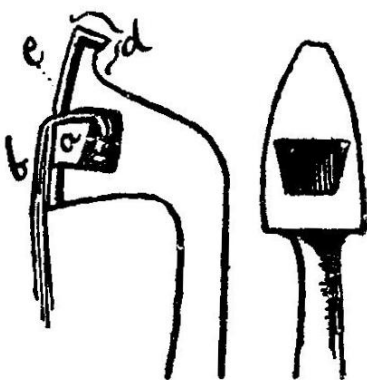
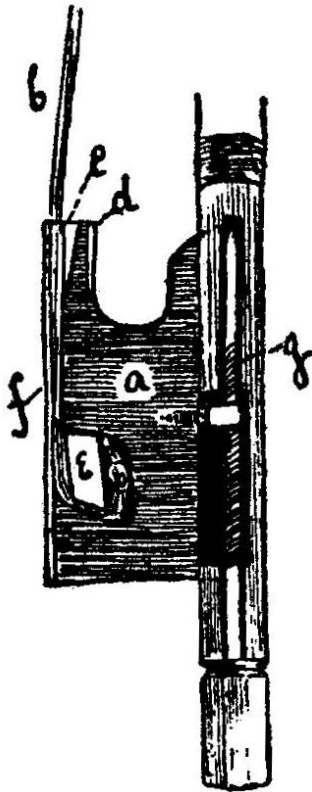


図40

またヘッドがプラグの圧力(40図a)でひびが入ったときも同様です。

ナットの修理もナットがオリジナルのもの、つまり優秀な製作者の弓にもともと付属したものである場合も同様に修理できます。古いナットは、しばしばスティックと接触する側面にそってヒビが入ります。この場合、ナットのいたんだ部分を切り取って新しい木を接着し、もとの形に削ります。私はタブス氏がこのように修理したナットを見たことがありますが、どこを修理したのかまったくわかりませんでした。



スクリー孔については、しばしばスクリーが短すぎる場合溝のすぐ上で楕円形にすり減ります。これは古いフレンチの弓で、最上の製作者のものでもしばしば見られます。

41図にナットとハンドルの断面でスクリーの働きと毛がどう挿入されるかを示します。

↑この図のスクリーでは上記のような孔が摩耗するようなことのないような正しい長さを示してあります。

弓の修理職人は、依頼人からメールなどで「チップ tip」の修理をしてほしいと言われてまごつくことがあります。多くの人が40図dの部分指着してチップと呼ぶことがある為です。しかし、この部分は専門家はピーク peak と呼んでおり、チップという呼び名は、毛の張り具合を調整するために弓の端につけてある八角形の部品を指す場合にだけ使われます。

弓によってはナットが移動する八角形のハンドルといわれる部分(図38 d)の下面が他の面より広くとってある場合があります。(図42)

図41

この広げてある理由はナットが移動する部分の面積を広く取って、ナットによっては揺れることがあるのを防止するためです。このアイデアには多少利点はあるものの、8面を同じ広さにとってもフィッティング時に特に注意深く作業すれば揺れは防げることがわかっています。



先ほどのやり方が最初はフィットさせやすいかもしれませんが、ハンドルの上をすべるナットの飛び出した部分はとても小さくて弱いので遠からず長手方向のヒビがはいってひどく揺れるようになります。原因は違いますけれど。

一番頻繁に行われる修理はフェースの再調整(re-facing)です。近代的な部屋のかっこいいガス灯照明はバイオリンの大敵で不注意なバイオリニストの弓を待ち伏せしています

図42 幸いなことに被害は本当に深刻なものではなく、経験豊かな修理職人であればヘッドを本来の優美な形に戻すのには時間はかからないでしょう。

第12章 ラッピングのまき直し、毛の張り替え、松脂の選択

RE-LAPPING—RE-HAIRING—CHOICE OF ROSIN.

ラッピングは消耗しやすく、新しくまき直す機会があるまでとてもイライラさせられます。この理由で革のラッピングが一番便利で経済的です。

しかし、革で巻いた場合は親指の爪の摩擦や圧力に弱いので、良質の銀系のラッピングほど格好くしっかりしたものではありません。爪などで傷みやすい場所を革にあわせて良質の銀線で巻いてやるととても持ちがよくなります。W.E.ヒル&サン商会はとてもきれいなラッピングをしてくれます。これは鯨の骨(訳注:ヒゲのこと?)でできており、漂白したr染色してありますが、実際問題として傷みません。いくつかの違う色糸を交ぜて巻くととても効果的で良い雰囲気になります。普通の糸を巻いたラッピングはときおり切れて演奏の邪魔になることがあるので、どうやって簡単にほどけるか知っておいたほうが良いでしょう。

1. まず、ナットに近いところ(普通はそこで切れます)で切れたものと仮定します。
2. スクリューを外して、毛を弓の上半分にゆるく、しかししっかりと巻き付けます。
3. それからラッピングを1インチ半ぐらい(約4cm弱)ほどきます。
4. 強い糸を用意して二重に折ります。二重になった端がハンドルの方に向くように弓に添えて置きます。
5. 手伝ってくれそうな親切な友達を見つけて、ラッピングの糸をしっかり持ってもらい、弓をゆっくり回しながら二重になった糸の上からしっかりと均等に巻いていきます。
6. 糸の端から半インチぐらいまで巻いたら自分の手にとって、ラッピング糸の端を二重糸のループに通します。ラッピングをまき直し始めたところから垂れている二重糸の端をしっかりと持って引き締めます。

これでラッピング糸の端をまき直した部分の下に引き入れたでしょう。以上がラッピングをまき直すやり方です。もしあなたがこの方法を試すだけの忍耐力や時間がない場合はちょっと封蠟を垂らす程度で夕方の練習時間ぐらいは持ってくれるでしょう。

毛の張り替えは弓を使っていると一番自然で頻繁に起こることなので、それを「修理」の範疇に入れるのはおかしい気もします。でも、少し我慢してお読みいただけますでしょうか。

最初に、アマチュアであれプロであれ、ご自分の弓を大事に思うなら自分で毛を張り替えようなどとしないうちにアドバイスしたいと思います。なぜなら、最上の弓でさえ毛をいいかげんにはられると驚くほど早くその適切な反り *cambre* をなくしてしまうからです。

毛を均等な力がかかるように張るのは長い経験を必要とします。毛の引く力がほんの少し偏るだけでも弓がねじれて、良いバイオリニストにとってはとても不都合な不安定なアクションを引き起こします。

弓毛を新しく張るには、まず事前に毛を外します。これは比較的単純な作業です。最初に毛の両端で短く切ります。ヘッド側の毛を持ち上げるとクサビ(40図 a)が見えます。これは先の尖った道具で簡単に取り出せますから、その下に納めてあった丸まった結び目も引き出せます。ヘッドについてはこんなものです。

ナットの方はほんの少し面倒です。まずフェルール(41図 d)を抜いて、スライド(41図 f)を押し出します。それでヘッドのときと同様に毛を持ち上げてクサビ(41図 e)を先ほどと同様につまみ出します。ナットのクサビ(41図 c)は強いダウンストロークのときにしっかりしたアタックを出すために毛を払ってヒール部にしっかりと固定するためのものです。このクサビは普通は固着されているので毛替えのときには壊して外します。

この後の毛替えの工程は新しい弓に毛をはる場合と同じです。

毛は、人によって、1本の弓に必要な量毎にひとかせ(束)にまとめておく人も居れば大きな束のままでそこから必要なだけ抜き取って使う人も居ます。すぐに目で見ただけでどの程度の量でよいかわかるようになります。

毛は一端で蠟引きの絹糸でしっかりと束ねられ短い端は結び目から16分の1インチ(1~2mm)のところで切りそろえます。束ねた糸がすっぽ抜けないように毛の端がほんの少しキノコの傘状に広がるように松脂で焼きます。

普通は、まず松脂の細かい粉を用意します。その粉をこの製版用ブラシに似た見かけの短い端にたっぷり付けて、赤く焼けた鉄に押しつけてればしっかりした塊でほどけなくなります。(訳注:この前後の文は大きな束のことか個々の弓用の小さな束かまぎらわしいのですが、最後のところはあきらかに個別の小さな束のことです)

この結び目はヘッドに彫った溝に入れてクサビをしっかりと上端が上のプレート、またはフェースと同一面になるように差し込みます。もちろん、毛は縁に沿って均一の平らなりボン状になるようにします。

それから細かい櫛でしっかり櫛掛けをし、ぬるま湯に数分ひたします。(湯の底にコイル状になってもよい coil fashion)

それから下端をしっかり持っておいて、もう一度上から下まできちんと櫛をかけます。

次に、ナットに目ネジをつけて、ナットがはまる溝のほぼ真ん中ぐらいの位置に置き、41図 e のようにくさびのサイズも読み込んで必要な毛の長さを決め、ヘッドの方と同じように端面を処理します。これにはかなりの経験がないと、長すぎたり逆のことになりやすく、どちらの場合もある種のボーイングスタイルに必要なテンションをうまく調節することができません。

この下側の結び目ができたらフェルールに通して、結び目を溝に入れて前のようにクサビで止めます。

ナットを調整してスクリューで留めます。もう一度毛に櫛をかけてからスライドを差し込み、フェルーレをナットにはめ込みます。その後、薄いクサビを、通常は接着剤を一滴つけて、41図 c のように毛の下に打ち込みます。これで弓の毛張は終わり、最後に松脂を塗ります。

張ったばかりの弓は松脂のブロックをこすっても松脂がつきません。まず、しっかりした紙の上に粉にした松脂を塗り拡げて、それで毛にたっぷりとり込みます。そうしておけば、あとは松脂のブロックから松脂を塗るのも簡単でしょう。

新しい毛を張ってすぐのときにはひどく粗く、きついギシギシした音とを感じるかもしれません。でも、その感じはすぐになくなります。

ここでもう一度繰り返しておきます。バイオリニストの皆さんが自分で毛替えをするのは絶対におすすめしません。上記の説明は「どうやってやるの？」と知りたい人達の好奇心を満足させる為にご説明しました。

市場に出回っている松脂の種類が多いのには驚きます。指に松脂の粉がつかないように、というより多分買い手の目につきやすいように素晴らしいデザインのケースに納められている物がたくさんあります。

いろいろな工夫をこらしたものがあまたある中で、私はごく普通のブックシェープのものが一番使いやすいと感じます。(訳注:原文 book-shape。分厚い本のような、長方形の形のものが一般的だったのでしょうか?)

一級品の松脂はベニステラピン油を煮詰めて作ります。

バイオリンについてのある権威書には多くの有名なソリストが普通の台所用松脂を使うと書いてありますが、いったいどこからそういう情報を得たのか疑わしく思います。

松脂は一つ一つ微妙に組成が違う為に先に塗ってあるものと調和しないかもしれないので、毛替えするまでは松脂を変えないことをお勧めします。

(訳注:訳者は松脂も販売しているので、その経験からあえて申し上げておきます。現代では商品の特性をきちんと説明してある松脂のメーカーも多いので、個々の特性をわきまえた上で、あえて混ぜて使うということもできるようになりました。プロの音楽家など、季節だけでなく大編成か小編成か、ソロかテュッティか、会場が大きい小さいかなど演奏条件の違いに応じて使い分ける場合もあります。)

第13章 近代弓の完成、ニコルソン博士の特許弓、ヴィヨームの発明、弓毛の自動張り(？)、折りたたみ弓、ケッテリッジ弓

弓がいかに単純で完璧なものであるかの傍証として、トルテの時代以降、それを改良しようという試みがあまりなかったことに触れておくのも意味があることでしょう。



この方向でいくつかの試行はなされましたが、ほとんど全ての場合が失敗して忘却の果てに沈んでしまいました。この種のうち目立って無様な怪物はあるニコルソン博士の発明です(図43) この醜く使いにくい武器は、その発明者にいわせると唯一のかくあるべきバイオリン弓なのです！それには正確に150本の、赤く染めた毛を張ります。その理由や、スティックの奇矯なカーブの理由については考えたくもありません。

ヴィヨームのきまぐれな才能は弓の改良のいろいろな方法を考案しましたが、一番複雑なものは固定式ナットでしょう。彼は、通常のナットではスクリューをねじると前後に移動するので常に数値状同じ場所に位置するわけではないことに気づきました。また毛は少しずつ伸びてくるので同じテンションにするにはスクリューでより長く引っ張らねばなりません。

これはもちろん弓のバランスを微妙に変えます。彼はあきらかにこれは大問題と考え、それを解決するためにバランスも毛の長さも変えないナットを作ることにとりかかりました。これが彼の特許 "*hausse fixé*." でした。

名前から想像できるように、ナットは外見上固定されていますが内部で移動する金属製の小さなナットが入っています。

これらのナットはとても不格好で通常のナットよりもはるかにかさばりました。彼が内部のナットの移動でも同じようにバランスが変わると気がつかなかったのは不思議です。

図43

このナットはより正確には一種の巻上機が入っているのですが、実際問題としてその違いは実用上というよりは理論上のもので演奏者には感じ取れません。結局この固定ナットはその他の浪費された才能の事例と同様に自然消滅しました。

ヴィヨームのもう一つの発明はスチールの弓です。なかなか見かけの良いものがありました。ものによってはブラジルウッドに似せてあるものもありましたが他は明るい青色です。これは金属の自然な色なのでおすすりめなのですが、見かけはとても変でした。

この弓は中空なので普通の弓よりさほど重くはありませんが、バランスはよくなくて、一つ重大な欠陥がありました。ある意味では木製の弓よりも強く、丈夫なのですが、衝撃に弱いのです。

弓は、慣れた人であってもたまに落とすことはあります。その場合でも先の方から落ちない限りは滅多に折れたりはしません。一方スチールの弓は、落としたときになにかに当たったりすると、一般にねじれたりへこみができたりして使い物にならなくなります。

ヴィヨームの3番目の失敗作は湾曲したフェルーレです。

ヒールの部分で毛が十分に拡がってくれると演奏に良いだろうと考えて、ナットから出てくる部分が11図の原始的なエジプトの弓のイラストに見られるように湾曲したフェルーレを作りました。これは、今でも安物の外国製の弓で見ることがあります。

彼のさらなる考案は、「自分で毛を張れる弓」でした。それは人里離れた場所で毛替えが必要になったり、弦楽器職人や弓職人が手近に居ない場合にとっても役に立つだろうという考えで作られました。

それが「セルフ毛張り弓パテント patent self-hairing bow」です。このやり方はしばしば「固定ナット」やスチール製の弓でも使われました。この弓に張る毛は、両端に横に真鍮の棒をつけてリボン状にして売られました。これらの棒を、ヘッドとナットに適宜彫られた刻み目にはめ込むだけで毛張りの完了です。このやり方はあまりうまくいかなかったようで、他の作者たちの発明と同じ道をたどりしました。

ヴィヨームの弓でもう一つ、あえて「改良」というわけではないのですがヴィヨーム自身はすばらしく光彩を添えると思っていたに違いないことがあります。彼の弓のいくつかのナットで、通常は真珠母貝の「目 eye」をはめてあるところに強力な小さなレンズをはめこみました。光にかざすと、海岸のリゾート地で土産物に売られているペン軸で見られる風景画のようにヴィヨーム自身の肖像画を見ることができるのです！

アメリカで別のいくつかの自張り弓の特許がとられたと最近聞きましたがまだ現物を見ていません。その国で、毛のかわりに細い糸を使ったり、さらに、特別長い弓で毛がすり減ってすべるようになったら取り外して上下を逆にして、新鮮な場所を使うようにするというパテントが考案されたと聞きました。

ヴィヨームの弓に戻りましょう。スチール弓を除いて、どれもサイモンやフォンクローズなど名前の通った職人の作なので、素晴らしいシャフトです（訳注：サイモンやフォンクローズはヴィヨームに雇われていた著名な職人）

ですから、これらを普通の弓に作り直すのは価値があるでしょう。これは優秀な技術者であればできることなので、やっかいなパテント無しに元の作者の普通の弓と同じ状態にできます。

マンチェスターのG. シャノーは旅行に便利なように二つに分解できるパテントの弓を作ったと聞きました。このアイデアは発明者が思うほどオリジナルのものではありません。日本のもはやすたれた胡弓は、釣り竿のように継ぎ棹になっている極端に長くてしなる弓を使っていました。

チャス・ケッターリッジ Chas Ketteridge による「改善された弓 improved bow」は間違い無く新奇で、大いに推奨できるものです。

この弓の毛は奏者が普通のポジションに手を置いても毛の幅全体にわたって端から端まで弦に均等に当たるような角度に張られているというものです。

それは出版社からも何人もの著名な演奏家からも好評でした。それはコードの演奏にははっきりとメリットがありますし、ある種のオーケストラ奏者にはとても使い勝手がよいと私には思えますが、一過性の注目を浴びたにすぎませんでした。

まことに「フィドルスティック」は多様な意味で魔法の杖です。上記に述べたように、変更や改善の試みがごく少ししかされていないということ、さらに再考の余地がほとんどないというのは特筆すべきことです。

フーガと言えばバッハ、シンフォニーと言えばベートーベン、バイオリンといえばストラディバリであるように、弓ではトルテなのです。彼らは皆、先人たちより偉大であり、その無比の天才によって玉座の上に鎮座しているのです。